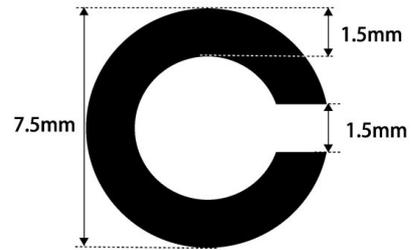
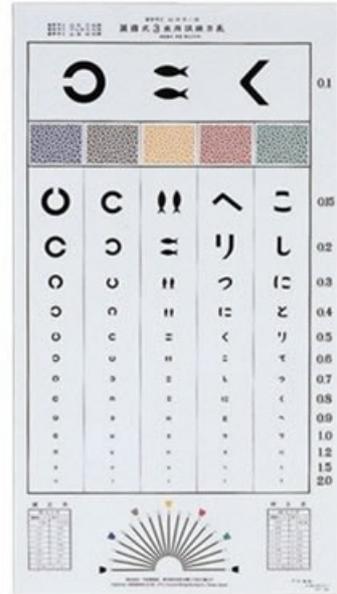
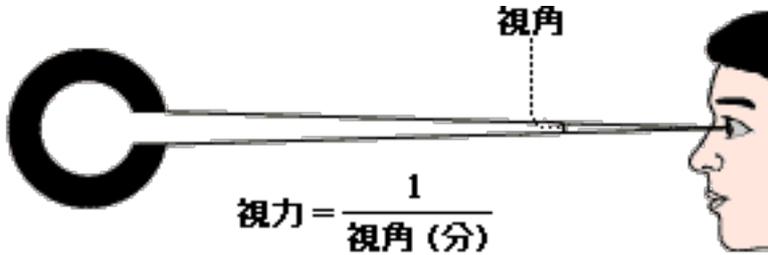


「視力検査」について

視力検査で使われている、アルファベットのCのようなマークについては、だれでも見たことがあるはずですが、このマークは**ランドルト環**といい、世界共通の視力検査用の記号です（ランドルトは、19世紀後半から20世紀初頭のフランスの眼科医）。

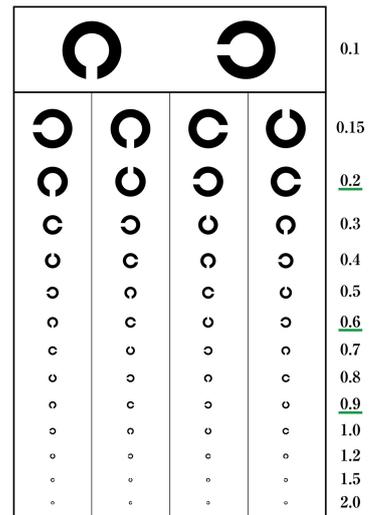
視力は、確認できる最小視角の逆数（図下）で表され、1分の視角を確認できる能力を、視力1.0といいます（1分は角度を表す単位で、1度の60分の1の角度）。例えば、確認できる最小視角が2分なら視力は $1 \div 2$ で0.5、10分なら $1 \div 10$ で0.1ということです。



ふつう視力検査は、視力表から5メートル離れて行います。視力表で視力1.0に該当するランドルト環は、高さ7.5ミリ、文字の太さ1.5ミリ、文字の切れ目部分の幅1.5ミリです（図右）。この「文字の切れ目部分の幅1.5ミリ」がちょうど、5メートル離れたところからの視角1分に相当します。5メートル離れたところから、この文字の切れ目を確認できれば（ランドルト環の向きがわかれば）、1.0の視力があることになります。（視力0.5用のランドルト環の大きさは1.0用の2倍、0.2用は5倍、視力表の一番上にある0.1用は1.0用の10倍の大きさです。）

視力検査の時には、黒いスプーンのような器具（正式な名称を『遮眼子（しゃがんし）』）で片目を押さえて検査を受けます。遮眼子を用いた検査方法は万国共通で、国際基準としてのランドルト環を用いた検査表には、日本独自のバリエーションもあります。

ランドルト環と平仮名を組み合わせた『大島式』や、平仮名と数字を組み合わせた『中村式』。“双魚指標”と呼ばれる魚2匹のシルエットが平行に並んだ『山地式』（図上）など、日本独自の視力表もさまざまです。



視力回復 eye-power のお店

学校検眼

判定	視力の目安	概要
A	1.0以上 (正常、正視)	一番後ろの席でも黒板の文字がよく見える。
B	0.9~0.7 (仮性近視)	一番後ろの席では黒板の文字がやや見えにくい。
C	0.6~0.3 (仮性近視)	前の方の席でも黒板の文字がやや見えにくい。
D	0.2以下 (近視)	一番前の席でも黒板の文字がほとんど見えない。

図左：学校検眼

学校で測る視力のこと。一般的な視力検査は、0.1から2.0で記録されますが、学校検眼の場合は、ABCDの4段階で検眼通知書に記録されます。

視力検査で一番上のランドルト環の向きがわからないとき

さらに前に出て視力表に近づいて測定することになります。

視力表から5メートル離れての検査の場合、もし4メートルまで近寄って0.1用のランドルト環の向きがわかれば視力は0.08、3メートルでわかれば0.06ということです。

視力が0.01未満の場合は？

指の本数を確認することができる距離で表す**指数弁**（例えば目から30センチの位置の指の数がわかる視力を「30cm/指数弁」）、目の前で手のひらを動かしてその動きがわかれば**手動弁**、明暗を区別できれば**光覚弁**といい、明暗がわからない状態は医学的に**盲**（もう）とされます。

裸眼視力と矯正視力

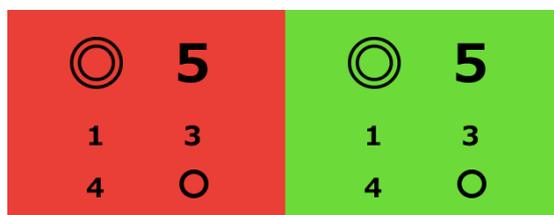
視力矯正を行う器具を使用しない場合における視力を**裸眼視力**、眼科などで矯正視力検査を行い算出される視力を**矯正視力**と言います。眼鏡、メガネ・コンタクトレンズで矯正を行っている場合における視力と混合される場合がありますが、基本的には検査値を示す言葉です。

裸眼視力と矯正視力を併記する場合は、矯正視力を括弧で括って表記します。補正視力と呼ばれることもあります。

視力の矯正の際に・・・

視力の矯正（眼鏡による矯正）の際に**R/G検査（レッド/グリーン検査）**（図 右）と呼ばれる検査を行なって眼にとってレンズが強すぎないかを確認します。

R/G検査とは、赤と緑の中にある二重丸を見て、「赤と緑ではどちらが鮮明に見えますか？」と濃い方はどちらかを答える検査です。眼の色収差を利用して、入れたレンズの度数が適正か、強すぎて（過矯正）いないかを確認しているのです。

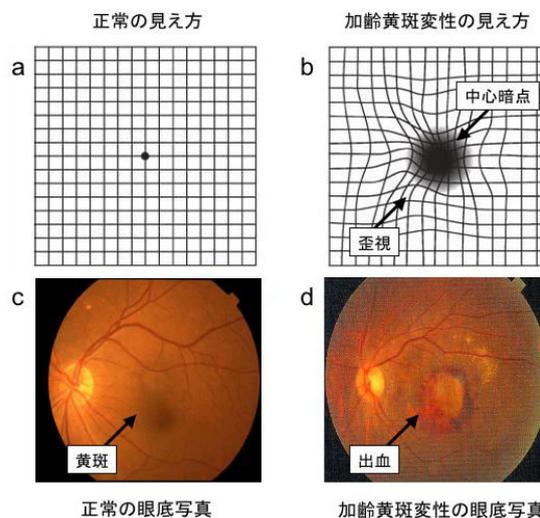


矯正に限界がある場合には・・・

「乱視」などによる矯正の限界もありますが、原因がわからないケースで視力が眼鏡でも出ないという場合には眼科受診がすすめられます。

特に40歳をすぎると白内障、緑内障やほかに糖尿病など内科疾患から目の病気になることもあり、放っておくと重症化して、失明に向かうこともあります。

白内障は、50歳代になると半数位の方に徴候がみられると言われていて、加齢変化によるものがほとんどです。緑内障に関しては40歳を過ぎると、以前は30-35人に1人位の割合でいると言われていましたが、疫学調査でもっと割合が高く、多くの緑内障の方がいると言われていています。日本においては緑内障、糖尿病網膜症、網膜色素変性症が中途視覚障害の三大原因とされ、加齢黄斑変性症（図 右）が続きます。



図上（右）：黄斑変性症

加齢により網膜の中心にある黄斑が痛んで（変性して）しまう病気で、加齢黄斑変性とも呼ばれます。

文字を読んだりする時など、物の形をしっかりと判別するのは黄斑の役目です。ですから黄斑が痛んでしまった場合には、基盤の目のようなものを見ると自覚症状がわかりやすいのですが、中心が暗く見えたり、歪んで見えたりします（図右：右）。

図は、「視力ケアセンター」「目ディア」「慶應義塾大学病院 医療・健康情報サイト」ホームページから引用しました。

この「診療所だより」や診療についての御意見・御要望などをお気軽にお寄せ下さい。これからの参考にさせていただきます。

編集・発行： 勝山諄亮

勝山診療所

〒639-2216 奈良県御所市343番地の4（御国通り2丁目）
電話：0745-65-2631